

●春日部市民文化講座（第26回） 「利休七哲キリシタン大名高山右近の茶の湯を考える」

◆日時：2018年6月13日(水) 11時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

■高山右近の清めの大病

今日は高山右近の茶の湯について考えていきたいと思います。最初に、織田有楽斎(1547-1621年)が珍しく高山右近の茶の湯について批評をしているところから始めます。「右近の茶には大病がある。右近は所作も思い入れも良いが、清めの病があって、露地のほとりはもとよりのこと、脇々の縁の下まで掃き清めて掃除に際限がない。この行き過ぎた清潔は、真の清いことを知らないからである」。この文章は1819年ですから、江戸時代の円熟期に深田香実正韻という人が『喫茶余録』という本の中で書いている言葉です。これは伝聞ですので、織田有楽斎が本当に言ったかどうか定かではありませんが、今日、皆さんにお話したいのは、織田有楽斎が高山右近の茶の湯を「清めの病の大病だ」と言ったのかということです。これは、高山右近を研究しているぼくにとっては嬉しい資料であり、発言ですね。

■織田有楽斎

この織田有楽斎というのは、国宝「如庵」という茶室を遺してくれました。これは、物的証拠で、ありがたいことですね。そして、この人は織田信長とは13歳離れている兄弟で11番目です。戦国武将として、兄・信長に仕えて、秀吉に仕えて、さらに家康に仕えて、あの戦国時代を生き延びて75歳まで生きたのです。最後は、長生きして美味しいものを食べ過ぎたせいとか、最後は中風になって亡くなりました。彼は、良く言えば、戦国時代にありながらも戦の中では逃げたり隠れたりしているのですが、争いを避けて生き延びたのです。本能寺の変の時に、織田信長が殺され、息子の信忠も殺されているのですが、信忠と一緒に二条御所にいた有楽斎は茶道具を持って城を脱出して、安土を経て岐阜に逃れて生き延びるのです。そういう人ですから、歌舞伎の世界や小説家の人たちも有楽斎を良く書かなかったのですよ。でも、ぼくはあえて違ふと言いつつ続けたのです。なぜなら、高山右近の茶の湯を「清めの病の大病だ」と言っているからです。この織田有楽斎というのは、高山右近と一緒に千利休の弟子です。織田有楽斎は古田織部と同様に、江戸時代に入って茶の湯の一角を為し始めていたのです。そのため、千利休の直系の弟子の一人として認められるようになっていたのです。



織田長益(有楽斎)像 (1622年、正伝永源院蔵)

■高山右近と織田有楽斎

高山右近は織田信長に仕えていました。次いで豊臣秀吉に仕えるのですが、秀吉が筑前箱崎(現在の福岡市)で「パテレン追放令」(天正15年、1587年)を出したことで右近は大名を捨てて逃げるのです。そして、徳川家康が「キリスト教は邪教なり」という「禁教令」(慶長17年、1612年)を出したのは幕府を守るための政治哲学を定めるためだったのです。それが明治維新まで続き、明治6年(1873年)まで「高札」があったのです。明治になって、外国から「日本はいつまでキリスト教を邪教とするのか」という圧力があって、高札を外したのです。何でこういう話をしているかというと、織田有楽斎は、信長の弟で戦国大名ですよ。だから自尊心も強かったですし、みんなからも一目おかれていました。ですから、秀吉や家康が重大な結論を出さなければならぬ時に、有楽斎が交渉役を務めているのです。彼の生き方は、なるべく血を流さなくて、犠牲者を出さなくてこの戦いをどうしたら収められるかということもいつも考えていました。ですから、彼は隠居した後は楽したいよということで、「有楽」という名を名乗ったのです。そして、徳川幕府の時代になって「もう安泰だよなあ」ということで拝領した江戸の土地が、数寄屋橋御門の周辺にあって屋敷跡が「有楽原」と呼ばれて、明治以降は「有楽町(ゆうらくちょう)」とされ、数寄屋橋は有楽斎の数寄屋(数寄者の家)があったというのでその名が付いたと言われているのです。でも、大阪冬の陣で豊臣家が完全に滅亡すると、「もう侍を辞めた」と言って隠居願いを申し出て、有楽斎は隠居します。隠居したのが建仁寺の塔頭の中にある正伝院というお寺で、「如庵」という茶室を造ります。

■織田有楽斎が造った「如庵」

「如庵」は二畳半台目という狭い空間の中に「鱗板(うろこいた)」と呼ばれる三角形の部分があるのです。反対側は水屋なので、合理的に考えればこんな空間はいらないのです。だけど、こうした空間があって、誰もこれを不思議だと思わなかったのです。それは、有楽斎が造ったからという訳だけで無く、何か秘密があったのです。この謎を紐解いて行く中で、今日のゲストである金子さんがとても良いお話をされました。「茶の湯の松風の如く、目には見えない響きを神の音として感じる」と、見えないけれども見えるもの、聞こえないけれども聞こえる音があるとおっしゃ



〔有楽窓〕

いました。ぼくは何回も「如庵」を見に行き、ここでおもてなしを受けると素晴らしい気分になるのです。そんな中で「如庵」の仕掛けに気がついたのです。連子窓の外側に細い竹が並べられている「有楽窓」です。この窓から風が見えるのです。風が吹いてくると、木々の葉が揺れて、障子越しにその光と影が客の目に動きとして見えてくるのです。まさに風の動きなのです。これって凄いセンスだと思いません。有楽齋は「如庵」を造った時に、躰口も造り、露地も造った訳ですが、その造り方は「待庵」と一緒です。「待庵」は二畳の茶室ですので、違うのは茶室の大きさだけです。ですから、徳川の平和が完成した時に、有楽齋は隠居所として利休さんの侘びの心をそのまま受け継いでこの「如庵」

を造ったのです。

■「如庵」の三角形に隠されていたもの

「如庵」の謎の三角形に戻りますが、点前座に面している壁、床の間に面している壁、そして水屋側にある壁に囲まれた空間なのです。正伝院の和尚さんとお話している時に、こんな話がありました。「高橋さん実はね、如庵を祇園衆が買い取って移す時に表千家の久田宗匠が立ち会ったのですよ。亡くなられたその宗匠が『実はその三角形の空間にキリスト教の仮託信仰物があった』とおっしゃっていたのですが、それは秘められているのです。」と。それが、マリア像か十字架か、何であったかははっきりしていないのですが、キリシタンの仮託信仰物がそこにあったのです。久田宗匠は表千家のお家元の直属の弟子ですから、たぶんお家元の所へ持って行ったのだと思います。そして、この仮託信仰物が出てきたら、織田有楽齋はキリシタンだったということになってしまうのです。

■説・ヴァリニャーノの下で開かれた室津会議？

ヴァリニャーノは、1582年(天正10年)に九州の大名の名代として子どもたち4人を引き連れてヨーロッパへ旅発つのです。子どもたちにとってはいい迷惑だったでしょうね、船に揺られての旅でしたから大変だったと思いますよ。ポルトガル、スペイン、そしてバチカンへの旅をして、そして8年後の1590年(天正18年)に帰国したら日本では秀吉からバテレン追放令(1587年)が出ていたのです。彼らは秀吉に報告するために、沢山の宝物を持って来たのですが、なかなか合うことができず留め置かれます。その留め置かれた所が室津なのです。2ヶ月以上に亘って留め置かれたのです。その間に、いろいろな大名達が室津を訪れてヴァリニャーノに挨拶しているのです。ヴァリニャーノがここで室津会議(これはぼくの想像する仮想会議です)を仕掛けたんじゃないかということです。この室津に宣教師たちのリーダーである巡察師ヴァリニャーノが居るわけですから、高山右近も古田織部も行っています。ですから、もしかすると織田有楽齋も室津まで行っているのではないかと思う訳です。船ですと直ぐなのですね。高山右近は、潜伏キリシタンの道を選ばずに殉教の道を選ぼうと決心し、「織部、あんたは偉い。日本人の大名として堂々とキリシタンでないように振る舞いなさい。有楽齋、君も隠れないで堂々と日本文化の中で生き抜く道を歩みなさい」というような話し合いをしたのではないかなあ…というのが、ぼくの説なのです。学説ではなく、説なのです。そういう風に理解したほうが、それまでのいろいろなことがすっきりするのです。

■織田有楽齋が言った「清めの病」

ここで織田有楽齋が高山右近に言った「清めの病」について申し上げますが、「清め」という言葉は、聖書の中の言葉であります。清いことやものを知れば知るほど、汚いことやものが浮き立って見えるのです。有楽齋がジョアンという洗礼名を受けて、秀吉に仕え、家康に仕えて75歳まで長生きして、しかも使命を受けてキリスト教徒として生きていたとすれば、どこかで何か右近のことを言っても不思議ではないと思うのです。だから、有楽齋は汚いものは何か、罪とは何か、嘘とは何か、過ちとは何か、正しいものは何かという葛藤の中で、高山右近の茶の湯、人生を思うときに羨望として「おれも右近のように生きたいなあ。殉教したい」と思ったかも知れないけど、そうではなくて、表舞台に立って、みんながキリスト教は邪教だと言っている中で、それを聞いても聞かないふりをして自分の死を悟りながら生きていったように思います。そういう仮説を立てて、何で江戸時代の『喫茶余録』に「右近の茶には大病がある。…」と有楽齋が言ったと書かれているのかということとをずっと考え続けて、今日のようなお話になった訳です。高山右近という人は「南坊」でしょう。彼は、宣教師のような南蛮坊主になることが憧れだったのです。彼にとっては、南坊と利休の侘茶が一つになっていたのです。織田有楽齋にはそういうことが良く読み取れたのです。それは彼が同門だからこそで、「いや～参った。高山右近のようにはなれないなあ」と思わず口を突いたのが、「彼は清めの病だよ」という言葉だったのだと思います。それが今日、ぼくが「高山右近の茶の湯を評価した織田有楽齋の本心ではないかな」ということで着地でございます。

高橋先生は「有楽窓」から風が見えると仰いましたが、丘の上教会の「在主庵」に座ると本当に見ることができます。